

ニセ旗作戦で世界を戦争に導く

—CIA がハリウッドを武器に

【訳者注】金正恩の暗殺をテーマとする映画 *The Interview* 製作の背後事情の暴露である。他にもほぼ同じ内容の論文があり、この説明は信頼できると思われる。「ニセ旗作戦」False Flag Operation がまたしても用いられた。この伝統的なアメリカの、卑劣で残忍な、騙しの戦術を知らなければ、彼らの世界支配歴史は理解できない。メディアは決して使わないが、この言葉はごく普通に広く用いられている。詳しくは、2014/4/24 掲載の「370 便機：“陰謀団”の背骨を折る最後のわら（1～4）」の特に（3）（4）を読んでいただきたい。

もし、ここに言われている通り、アメリカが北朝鮮をニセ旗攻撃するとしたら、日本人は単純に拍手喝采するのだろうか？ そして集団的自衛権が適用されるのだろうか？

By Larry Chin

Global Research, December 27, 2014



ほとんどすべての戦争がニセ旗作戦から始まる。

やがて始まる北朝鮮とロシアにおける紛争も例外ではない。

集団ヒステリーが煽りたてられている。これは、北朝鮮とロシア政府のものとされる行動への報復として、モスクワとピョンヤンへの攻撃を正当化するためだが、実はこれは CIA とペンタゴン（米国防省）が仕組み実行しているものだ。

北朝鮮をニセ旗攻撃：CIA がハリウッドを武器として利用

ソニーへのハッキング行為から、映画『ザ・インタビュー』をめぐる雑音の高まりにいたる、北朝鮮への攻撃キャンペーンは、CIA のニセ旗作戦のあらゆる特徴をもっている。

ハッキングと、映画観客への脅迫と言われるものは、もっぱら北朝鮮のものとされているが、そこには FBI による根拠のない非難以外には、信頼できる証拠はひとかけらもない。ピョンヤンがやったという証拠は全くない。しかしそれはすでに公的に承認され、一般大衆は事実として受けとめている。

“北朝鮮に攻撃されているアメリカ” という考えはウソである。

ハッキングを行っている謎のグループが現実には誰であるかは、都合よく突き止められないままだ。多くの可能性——ソニーのインサイダー、職業的ハッカー、一般のインターネット荒し——があっても、真剣に捜索はされていない。より可能性のあるアメリカ情報局——CIA や NSA など——の関わり、彼らの圧倒的な技術力と、並ぶ者のないハッキングと監視能力は、注意深く無視されている。

誰の利益になるか？ ピョンヤンがそんなことをするのは理屈に合わない。何年もの間アメリカとの関係改善を求めてきた（そして果たさなかった）孤立した貧乏国の北朝鮮が、その比較的弱い能力でアメリカをサイバー攻撃し、圧倒的なサイバーと軍事力の返報を確実にすることに、なんの利益があるのか？ これに対し、ワシントンにとっては、北朝鮮の体制転覆をもたらすどんな行動も大きな利益になる。

しかしピョンヤンが関わっているか、いないかという議論は、より大きなポイントを見逃している。

このプロジェクト、『ザ・インタビュー』の製作から、時間をうまく調整した国際的事件までの計画は、初めから CIA、ペンタゴン、国務省によって指導されたものである。それはプロパガンダであり、心理戦争の兵器である。それは戦争を目的とする、民衆文化の軍 - 情報局による操作の、特別に邪悪な例である。

そこにおかしいところは何もない。

『ザ・インタビュー』は、CIA と Rand 研究所（米シンクタンク）が直接、公然と結んで、明白に北朝鮮の不安定化を目的として、製作されたものである。出演し、共同監督でもある

Seth Rogen は、彼が「CIA 職員に間違いないと思った、政府の人たちをコンサルタントとして、直接、共同で仕事をした」と認めている。最初は、ある「名を言えない国」で起こるプロットとして考えられていたが、ソニー・ピクチャーズの共同チェアマン Michael Lynton——ランド研究所の理事でもある——が、映画製作者に、この映画をはっきりと金正恩殺しのものとするように勧めた。ランド研究所の北朝鮮専門家 Bruce Bennett もまた強く働きかけ、この映画が政権転覆に寄与するように、韓国に反ピョンヤン行動を起こさせるようにすることを熱心に主張した。他の国務省の要人たち、ヒラリー・クリントンにつながる工作人員もこの台本を読んだ。

『ザ・インタビュー』にかかわった、面白味のない Rogen や共同監督 Evan Goldberg を含め、子供じみた、低能の、没趣味の、無思慮な者たちが、何か月もこうした軍 - 情報局のならず者たちと一緒に仕事をした——いわば援助交際をした。彼らは、自分たちがこれらラングレー (Langley) の死の商人たちの政治的娼婦になっていることに、何の問題も感じなかったらしい。実際、彼らは楽しんでた。彼らは CIA とペンタゴンが彼らを利用していることに、何の痛痒も感ずることなく、この愚かな映画そのものよりも遥かに大きなアジェンダに、映画を利用させていた。彼らはただ、有名になることだけに興味があったらしく、もっぱらそれだけでこの馬鹿げた映画を作らせた。

CIA は今や、アメリカ全土に、反北朝鮮の戦争ヒステリーの波を起こすのに成功した。「北朝鮮が我々をゆするのには許せない」「キムが我々の言論の自由を奪うのは許せない」といった、無知なアメリカ人たちのキーキー声を聞くがよい。ソニーが“勇気”をもって“悪なる北朝鮮に立ち向かう”ために、この映画を公開するかどうか、といった滑稽な議論を聞くがよい——奴らは“アメリカをゆすって”今、この映画を見ることを“愛国的な義務”と考えている映画観客の、“権利を侵害”しているのだ。

これらの精神的小人たちは、彼らの世界観を、戦争好き娯楽や、暴力ビデオゲームや、“やっつけろ！”といった文化を推進する、CIA という国家機関によって形成されていて、絶望的に脳が硬化し、回復できないほど人間性を失っている。ほとんどのアメリカ人が、愚かな上に虚無的になり魂をなくし、スクリーン上だろうと現実だろうと、キム・ジョンウンが死ぬのを見ることに、何の問題もないと考えている。この醜いアメリカの一部が、9・11 後の CIA の最も見事な軍隊——暴力的で、憎しみに満ち、操作が簡単で、太鼓の音に従ってどこへでも行き、命令に喜んで従う、羊人間たちである。

その次には、本当に馬鹿というべき人間がいる。彼らは現実のほとんどを忘れていて、「そう気にするな、これは単なる喜劇だ、単なる映画だ」などと言う。ナイーブで、アメリカ人だけは特別だと思っている者たちは、戦争というもの——彼らと彼らの映画が CIA に実行

させようとしている殺人計画——を、ただのゲームだと思っている。

CIAの仕事は殺しである。そして現実には、国家元首を狙う暗殺計画がCIAの文書の中に存在する。キム・ジョンウンは疑いもなく、本当の暗殺リストに載っている。これもまた、訝るようなことではない。

本当の戦争行為

オバマ政府の挑発的な、敵意ある外交スタンスが自らを物語っている。ワシントン是一个の国際的事件に火をつけようとした。それはピョンヤンの政変を望んでおり、北朝鮮や中国がどう考えようと気にせず、北朝鮮がどう出ようと全く気にしていない。

これに対して、かりにベンヤミン・ネタニヤフを暗殺し、テルアビブの政府転覆を図る筋書きの映画があったとしよう。このような映画は、たとえ台本として許されただけであっても、完全にストップがかかるだろう。もしそれが検閲を通ったら——『ザ・インタビュー』はアメリカの厳しい検閲を“魔法のように”通り抜けたのだが——オバマは自らテルアビブへ飛び、謝罪するだろう。少なくとも、ワシントンはこの映画とその内容には関与していないという声明を発表するだろう。

『ザ・インタビュー』の場合はそうでなかった。なぜなら、アメリカの上層部が現実には、キム一族が殺されることを願っているからだ。

北朝鮮が（サイバー攻撃に）かかわっているという証拠もないのに、オバマ大統領は“それに見合う応報”を約束した。すると即刻、北朝鮮のインターネットは、不思議にも一日間、停止した。

これが偶然の一致だと信ずるほどナイーブでなければ、すべての徴候は、アメリカのスパイ局（CIAやNSA）、あるいは、ワシントンやラングレーで働くハッカーを指し示している。

北朝鮮が、この映画の最初の宣伝となった、ソニーへのハッカー行為にも、映画観客への“脅し”にも何の関係もなさそうだということになれば、北朝鮮のインターネットの閉鎖は、一方的な、挑発によるのでない戦争行為だったことになる。ワシントンは公的に責任を取っていない。もっともらしい拒否の理由をつけて、今後もそうすることは決してないだろう。

おそらくそれは予行演習だった。メッセージだった。アメリカは、北のグリッドをどれくらい簡単に外せるかを試してみなければならなかった。先に述べたように、技術的に圧倒的に

優っているのだから、それはいとも簡単だった。そしてピョンヤンへの戦争が本気で始まったら、アメリカ軍は彼らの思い通りに正確に事を運ぶだろう。

アメリカは、そのアジア - 太平洋筋肉の屈伸運動をしながら、ピョンヤンだけでなく、大きな将来の目標である中国にもメッセージを送っている。最近数カ月の、他の屈伸運動の中には、香港における反北京運動（CIA と米 국무省に支援された）、現行の、石油をめぐる南シナ海での挑発、それに新しい対ミサイル装置とミサイル誘導の海軍船艇をこの海域に送る、新しい防衛合意が含まれる。

少なくとも言えることは、アメリカが再び、近いうちに起こり得る、新しい戦争を遂行する態勢に入っているということである。CIA とソニーは、愚かな映画を武器に使うことに成功し、これを戦争の大義と関の声にしようとしている。

もし爆弾が北朝鮮に落ちたときには、『ザ・インタビュー』の製作者、それを作らせたあらゆる責任者、カネを払ってそれを見た群衆の手が、血で汚れるだろう。

もしアメリカが、まともな、正常な社会であるとしたら、『ザ・インタビュー』はその正体を暴露され、徹底的に弾劾され、ボイコットされ捨てられるだろう。ところがそれはお祝いを受けている。

CIA は非難されるべきところなのに、**Seth Rogen** は彼らと不純交際をしている。アメリカ社会はますます機能を果たさなくなり、彼らを愛し、彼らに従っている。

ロシアに対するニセ旗攻撃

『ザ・インタビュー』について、ロシア外務省スポークスマン **Alexander Lukashevich** は、北朝鮮に同情する声明を発表し、この映画の意図は攻撃的で恥ずべきものだとして正しく評価し、アメリカの報復的行為は非生産的で、国際関係にとって危険なものだと非難した。

もちろんワシントンは、国際関係の改善に関心などもっていない。

ロシア政府は知っているはずである。

金正恩のように、ウラジミール・プーチンは、悪しざまに言われ、悪魔化され、ニセ旗攻撃を絶えず受けている。キムが今日の嘲笑の的だとすると、プーチンは悪の権化である。

ここ数か月のワシントンによる、ヒステリックな、破れかぶれの挑発を考えてみよ。

CIA の操作による米 - NATO クーデタが、ウクライナ政府を転覆させ、ロシアの玄関先に親米のネオ・ナチ犯罪機関を樹立した。CIA とその世界的なプロパガンダ・ネットワークは、プーチンとロシアを、侵略者であり“民主主義”の破壊者だと決めつけた。

マレーシアの MH17 航空便はウクライナの工作員によって撃墜されたが、これは CIA や Mi-6 (英秘密情報部) などのサポートによるものだ。このニセ旗作戦はロシア——“プーチンのミサイル”——を犯人とするものだった。アメリカと NATO は、いまだにこれらの殺人をプーチンの仕業にしようとしている。

イスラム国への戦争——大規模な CIA のニセ旗作戦——は、アサド政権を打ち倒し、同時に軍事的にロシアに立ち向かおうとするものである。現行の、アングロ・アメリカンの、この地域の石油とガス供給やエネルギー輸送ルートの支配もまた、そこからロシアと中国を締め出すことが狙いである。

アメリカと NATO は、経済制裁によってロシア連邦を攻撃している。アメリカとサウディアラビアは、石油の値崩れを起こさせて、ロシア経済をさらに悪化させようとしている。全面的な軍事的エスカレーションが計画されている。米議会は、ロシアに対する公開の宣戦布告に等しい、新しい法制化を進めている。

次は何か？ CIA はそろそろ、Seth Rogen-James Franco によるプーチン暗殺の映画を発表してもよい時期である。もう一つの“パロディ”だ。それとも、アサドでも他の誰でも、アメリカが民衆の敵に仕立てようとしている人物を殺す映画を作ったらどうか？ ラングレーはそんなことはしていない、などと考えるはならない。…

(「ブッシュ族が帰ってくる」「ジェブ・ブッシュが仕事を仕上げる」のセクション、ほぼ1ページ分省略)

今日、集団的なアメリカ人の意識では、金正恩とウラジミール・プーチンは“バッド・ガイ”である。しかし大量殺人をする戦争犯罪者ブッシュ族は、聖人であり、“ナイス・ガイ”である。

もしジェブ・ブッシュ大統領が実現すれば、それは純粋な戦争大統領政権になるだろう。これは我々が経験したことのない、口に言えないほどの恐怖を約束し、ホロコーストに呑み込まれた世界に君臨するものとなるだろう。